

新 知 見 あ れ こ れ (6)

奥 原 弘 人

H. Okuhara: Some new or noteworthy plants found in Nagano Prefecture (6)

1. ランの変りもの——チクマジガバチ

昨1987年7月7日山野草の愛好家で松本市在住のH氏(自然保護のため地名、人名を略記)から、見たことのないランがあった、と電話があったので早速これも同好者で栽培の名人F氏と行って見た。

植えてあるのを観察すると葉はジガバチソウに似ていて横脈があって縁は細かく縮れている。花は開花中のもの10個を含めて計17個ついている。側がく片は長さ7~10mm、線形で淡紫色、側花弁は糸状、長さとは側がく片と大体同じでジガバチソウに似ているが唇弁は基部の3~4mmが直立していて、その上で約80度折れ、ほぼ水平となって長さ6~8mm、先端は広くさび形または円頭、黄緑色でジガバチソウと違っている。クモキリソウの唇弁は正面から見ると横広の四角形で先の方は下方へ大きく巻きこんでいて色は緑色であるから、これとも違う。

場所は筑摩山脈の一角で附近にはジガバチソウはあったが、この花形のものは1株だけという。この山脈の鉢伏山にはフガクスズムシのあった記録がありH氏も他から入手して植えているが、それとは明らかに違うという。これはジガバチソウとクモキリソウとの雑種かジガバチソウの変形であろう。

その3日後の7月10日、北アルプスの南部山地で同形のものが数本あったので1株を鉢植えとし2本の花茎をとって標本としたが、取りあえずこれをチクマジガバチとしたい。

2. タデの雑種——フトボタデ

昨1987年10月4日佐久教育会の植物委員会の例会が南軽井沢で行われ私も同行することができた。この時信濃追分駅南方約1.5kmの河原でヌマガヤツリの大群落を観察中、1本のきれいなタデを見つけた。これは、高さ約60cmで10~30cmの枝を数本つけ、花穂は長さ1~3.5cm、径1cmと太短く、花が密につき先端部が紅色で美しい。附近にはオオイヌタデが多く、少し離れてミゾソバが群生していたので、この両種の雑種と考えられるが、花穂の形からフトボタデとした。

オオイヌタデもミゾソバも1年生であるから、この雑種も1年生で、種子ができなければ、この種もこの1個体だけで消滅するものと思い、再び同月28

日に行ってみたところ、上枝は既に霜害を受けたようで、種子も熟したようにはみられなかった。

枝を採って標本とし写真にも写してあるが、この珍種もこれでこの世から消え去ったことになろうか。

3. ワタムキアザミを観察して

長野県植物誌の編纂にあたりアザミ属を分担することとなり、日夜努力しているが、ここに二つの難題がある。第一の問題は葉裏雪白色のグループで、これについては「木曽谷の植物」でも述べたように多様な変異があって、まとめるのに苦心を要する。

第二の問題はワタムキアザミである。これは本県では南部で局地的に見られるが、県下で見えるものは文献に合わないものがあるので、先年これを雑種として本誌第16号に書いた。この問題はその後すすきりせず、観察を続けてきた。

ワタムキアザミに最も近いのはヒダアザミで、これらは独立種として文献に分類点が記述されていて大井・(北川改訂)の「新日本植物誌」と、平凡社の「日本の野生植物」には検索表も出ている。要点は、ほぼ同じで、ワタムキアザミは根出葉が葉柄に沿下し欠刻~羽状深裂し、茎葉はやや茎を抱くとあり、ヒダアザミは根出葉に長い柄があり全縁で刺針があり、茎葉は茎を抱かないとある。

ところで県内産のものをみるに文献でみるワタムキ型のものもあるが、このほかに根出葉は全縁で長い柄のあるヒダ型で茎葉とともに大きく茎を抱くものがある、これが北村先生が雑種とみて報告した型である。しかし雑種であるならば、その両親がなければならないが、文献にあるヒダ型は見られない。一方岐阜県のヒダアザミは、私の見たものは根出葉もワタムキ型で頭花とともに多少大きい程度である。抱茎という点は重要と考えられるが、葉の形はナンブアザミなども多形でノハラアザミでは品種となっている程度である。

以上のようにみると、この両型を独立の種とみることは不可能で、ヒダアザミはワタムキアザミの少し大形のもので、根出葉の全縁長柄型はワタムキアザミの一品種として扱うのが適当と考える。よってこれを *C. tashiroi* f. *integrifolium* マルバワタムキアザミとしたい。なお、この型のものを松本市の

自宅に植えたところ数本に株立ちして壮大となり多数の長枝を出して頭花をつけたが、以前下伊那でも日のあたる山地で見たのにこの形のものがあつた。ちなみに県内で見たこの類はほとんど日のあたらない林内で、しかも水辺が普通である。

4. アザミの新種——リョウノウアザミ

伊勢湾周辺要素として知られるスズカアザミは本県内でも伊那谷、木曽谷の南部に多産する。文献によれば本種は花時に根出葉は残らないとあるが、残るものも見られ、岐阜県の東濃地方でも見ているが、長瀬氏もそこで見ているという。これを観察するに根出葉は深～中裂し先端の刺はより鋭い。茎葉は少数で小さく、分枝も少ない。茎と葉の色は緑が濃い。総苞片はスズカアザミに似ているが、やや短く開出するほどではない。

これまでは、これはスズカアザミそのもので、スズカアザミの根出葉が残らないというのは、ヤチアザミなどと同様、草むらの中に生えたり群生しているためと考えていたが、それ以上に違いが大きい。スズカアザミとキセルアザミかワタムキアザミとの雑種かとも考えたが、附近にそれらは見あたらない。

とりあえず、これを自生地・信濃・美濃の地名からリョウノウ(両渡)アザミとよぶことにしたい。



5. サビサルナシが県内に

リョウノウアザミ

植物研究雑誌第15巻第11号と第25巻第7号によればサビサルナシは最初朝鮮で発見された後、池上義信氏が新潟県の2ヶ所で見つけたといい、サルナシと異なり葉柄と葉身の主脈に鉄錆色の毛が密生し花序にも同様の毛があるという。

私がサビサルナシらしいものを最初に見たのは日本シダの会の採集会が戸隠高原で行われた1962年のことで、雨天のため早めに引きあげた一行に離れ山崎淳氏の好意で牧場へ向って山道を歩いた時であり、1983年には同様のものを小谷村の土谷川上流でも見ているが、昨年また戸隠高原の別の所で見ている。ただ私の見たのは若枝にも鉄錆色の毛が密生するものである。この枝の毛についての記載は植研誌には見あたらないが、多分見落としたのであろう。したがって私の見た3例はいずれもサビサルナシそのものと考え。

なお長野県植物誌の資料として集まった標本の中に丸山利雄氏が1979年に鬼無里村で、1983年に栄村での採品に同様のものがある。またやや毛は少いがサルナシよりはるかに毛の多いのを1982年に池上睦美氏が小谷村北小谷で、1983年に中村英夫氏が麻績村北山で採っているが、これらも同じものとみてよいであろう。

いずれにしても信州にも北部の各地にサビサルナシが分布しているようであり、その南限は今のところ麻績村の聖山南麓である。なお北信でも一般にはサルナシが普通である。

6. フサザクラの変種——ホソバウラジロフサザクラ

木曽で採った古い標本を整理していたところフサザクラが出てきた。野帳を調べたところホソバウラジロフサザクラとある。これは1966年7月30日木曽郡木祖村塩沢で採っている。葉の形は楕円形で基部はやや鋭いくさび形、裏面は粉白である。フサザクラの葉は普通は広卵形～円形で基は切形～円形で、裏面粉白のものに品種ウラジロフサザクラがある。フサザクラに比べればこの採品ははるかに細形である。葉の形、裏面の色からみて、これを変種と認め *E. polyandra* S. et Z. var. *leptophylla* Okuhara ホソバウラジロフサザクラとする。

7. コオニユリの一型——オノエコオニユリ

草原で見るコオニユリは普通高さが1.5 m内外で数個ないし十数個の花をつけている。美ヶ原の台上にもコオニユリは多いが、ここで見るものは高さ17～25 cmで葉の長さ4 cmくらい、花も1～2個で小さく全体が短縮している。

これは生態的変異とはみられるが、甚しく短縮しているのと、このような例は他にもあるので1品種としてオノエコオニユリと呼びたい。

アザミについて先年からご指導をいただいた北村先生、多数の標本を寄贈して下さいた高山市の長瀬秀雄さんほか上記の各氏にお礼を申し上げます。